

- | | |
|----------------------|------------|
| I 序—調査目的・方法と地域概要— | 5) 大火 |
| II 形成と変遷 | 6) 区割変形の要因 |
| 1) 城下の形成から | 7) 住民移動 |
| 2) 雑賀地区の変遷 | 8) 地域の景観 |
| III 現在 | IV 人と街 |
| 1) 地区内住居区割変更に係る変遷等推定 | 1) 教育 |
| 2) 住居区割の変化 | 2) コミュニティ |
| 3) 道路 | V 結 |
| 4) 駐車場・空き家 | |

I 序—調査目的・方法と地域概要—

本調査では、城下町松江市において、誕生以来ほぼ変わらぬ街区画を保ち続けてきた地域である雑賀町を例に、どのようにその様子を保ってきたのかを観察したい。

雑賀町は、山陰地方島根県の県庁所在地である松江市の中心市街地を流れる大橋川の南部（橋南地区）にあり、地区南部には雑賀町を囲むように丘陵が巡る。松江市は人口約 15 万人で、市域 220km² でそのうちの 10%が宅地である。松江市の旧市街地においては城下町の街路の多くを踏襲しており、第二次世界大戦の戦火をも免れた為大規模な区画整理等も実施されていない。その中でも特に雑賀町は、城下町成立以来の足軽鉄砲衆の町であり、細い街路や細長い住宅が地区全体で現存する。

調査は雑賀地区（新雑賀町・堅町・横浜町・西津田町等を除く雑賀町（第 1 図））を取り上げる。成立からの変遷等を地図・文献等で追ひ、聞き取りをもとに実地見聞で確かめる。

II 形成と変遷

1) 城下の形成から

I でも少し触れたが、松江市は 1607（慶長 12）年に堀尾吉晴によって始められ、1611（慶長 16）年に竣工した時期に並行するように松江城下町が形成された。城郭は平地に囲まれた丘の上に築かれた平山城である（写真 1）。城下町は以前白砂や浅瀬であったところに、土砂を運び、濠を掘削し、城下町が造作された。当時の主要道は売豆紀神社→洞光寺→天神川→寺町→和多見→大橋川→末次というものの一つであった（第 2 図）。やがて末次・白濁で町割りが行われ計画的に城下町が造営された。中心街は松江城の東側で、外濠に囲まれた長方形区画であり武家屋敷地区となった。周囲には町屋（商職人街）が京橋川と大橋川の間、北堀・奥谷・石橋間、米子町におかれた。城下町の半数以上は松江城を中心とする旧末次郷であった。大橋川南部の白濁では、東に寺町、西に町屋がおかれた。寺院は



第1図 雑賀町参考図

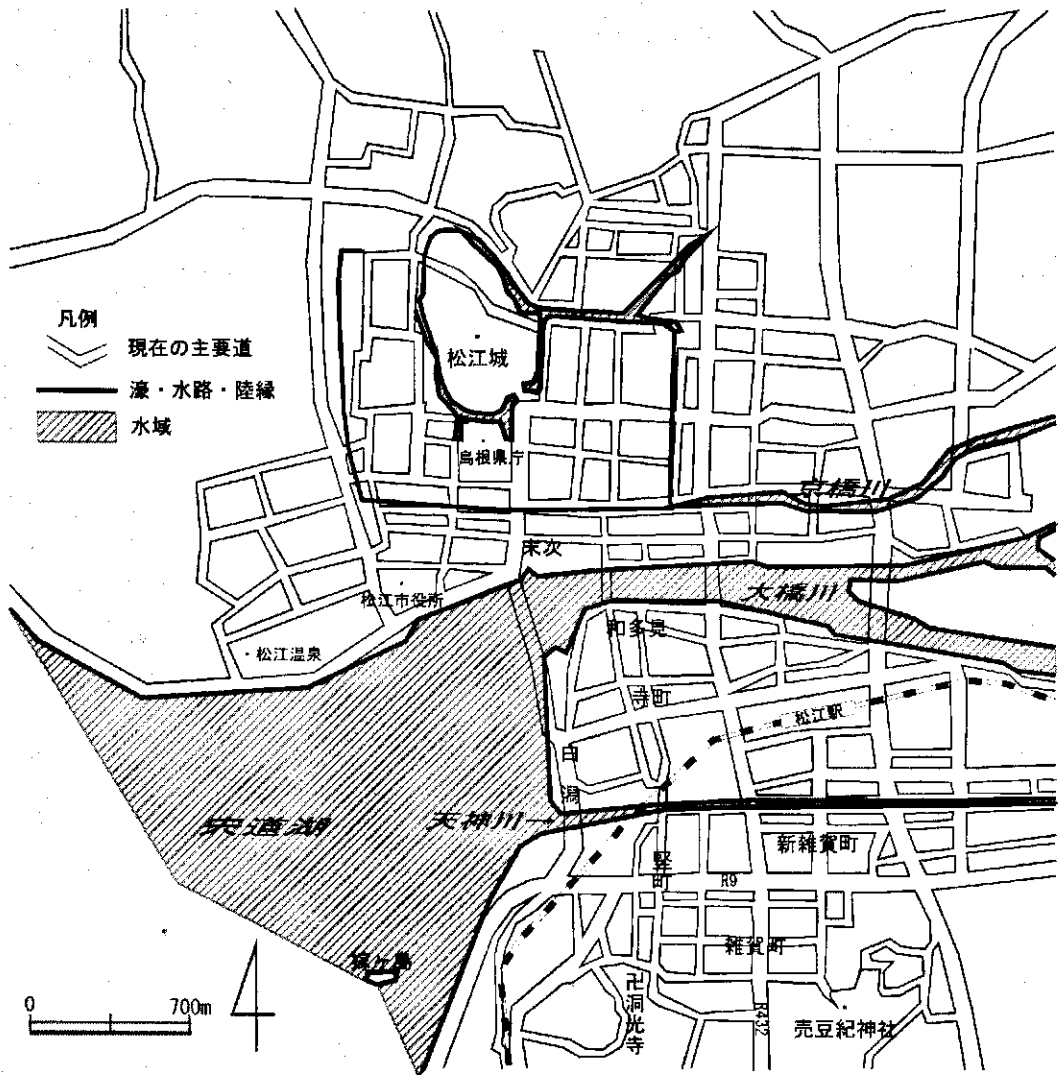
出典) 国土基本図。

多く広瀬富田城下より移転したものであった。寺町のさらに東側(現在の新大橋通り以東)は沼地や浅瀬ばかりで屋敷はなく、1908(明治41)年の松江駅開設までは田畑までになった程度で、江戸時代には藩主鷹場であった。

こうした中で、雑賀地区はまだ未完成であった。この地域は松江城南の防衛線の機能を果たした寺町よりもさらに南部にあり、鉄砲足軽が仮小屋などを建てて住んだ。当初は散在した鉄砲足軽も後(松平直政頃)にはこの地域へ集積する。雑賀という名称は当時勇猛であった紀州の鉄砲衆、雑賀党にちなんで鉄砲足軽居住地のこの地に付けられたようである。



写真1 松江城天守閣



第2図 松江市現在図への古地名表示図

2) 雑賀地区の変遷

築城当初はほとんど整備されていなかった雑賀地区も、松平直政が入部（1638（寛永15）年）して以来大きく開発が進んだ。それは当時、直政は軍備充実を目指し、特に鉄砲戦力の増強を図った。それにより増員された鉄砲足軽（城下に散在して居住していたものを移住させる）の居住地である雑賀地区を優先的に造成する必要があるためのものである。具体例としては、堀尾時代に6本であった南北路が8本となり、東西路も6本から7本へと変化している。南北路の間隔は湿地である地域における排水面から、地形を考慮してわりに高い土地に道と排水溝を作ったようで不等間隔であり、それは堀尾時代のものを踏襲していると思われる。新たに敷設された東西路は等間隔で、それに沿う形で排水溝も掘削されたようである。こうして雑賀町の基盤状の街区が形成されたようである。ここの足軽屋敷は間口5間、奥行き15間の75坪という同規格（1間≒1.81m）に定められ、1区画10軒ずつが南北長に20軒で1組になって、それが全体で18組あった。

その後、1730（享保15）年頃の雑賀町絵図（第3図）によれば、かつて深田・浅田と呼ばれた湿地が埋め立てられ町家・足軽屋敷が並んでいる。津田街道（現国道9号）北縁には下水抜大溝があり、

これは現在暗渠となり街道を広げるものとなる。大溝止まりであった2丁目の西端はさらに西へと広がり堅町と繋がる。さらに南北向きの5丁目雑賀小学校南に、防御上必要な屈曲道がこの図に登場する。7丁目東南には鉄砲場があり、鉄砲隊の練習場であったようである。さらに延享年間松江城下図（1744年～1747年頃）によれば、津田街道北側に新たに足軽屋敷ができ、現在の本郷町・新雑賀町が屋敷地になり始める。周囲には水抜き大溝が整えられ辺りの排水はさらに進んだようである。もう少し詳細な図を見ると、3丁目の1丁目は「マガリ丁」と呼ばれており、その西側にある橋は現在でも斜めに架かっている(写真2)。このような点からも街区の概ねの形は変化していないことがわかる。



写真2 マガリ丁

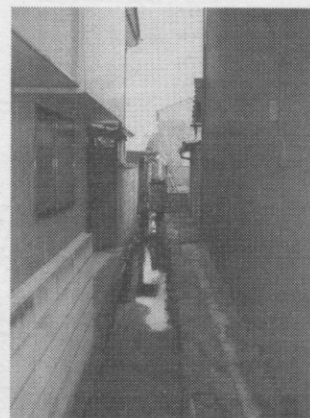
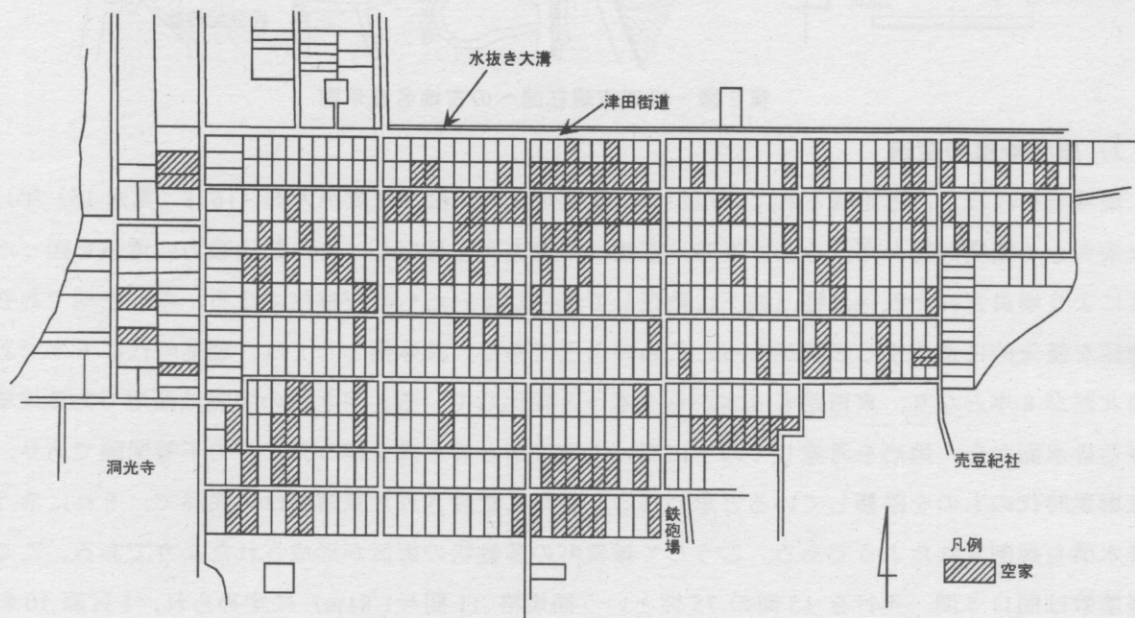


写真3 東西方向水路の例

雑賀の特徴としては排水溝により区画されていることである。明治初期の資料では、地区の東西（区画内住居背面）南北（多く道路沿い）に幅3尺（約0.9m）の小溝を掘り、それは幅1間（約1.8m）・深さ5尺（約1.5m）で石垣作りの大溝へと流入し天神川へと注ぐ。現在それらは丁目界にもなり、東西方向のものは基本的に区画内の住居背面にある（写真3）。南北方向のものは道路の東縁を流れる。



第3図 享保頃 雑賀町古絵図

出典『松江市史』付録より作成。

注) 当時不作や災害に加え人員整理等で空家が多かったようだ。